

# 小学校英語活動の現状と今後の指導法

## Current English Teaching Activities in Elementary Schools and Future Teaching Methods

塩見和広

### 要旨

英語をビジネスや他の重要な目的に活用していない人々は、それを勉強する意義や必要性をどれだけ感じているのだろうか。私は2017年8月、Mulleというスウェーデンの幼児向けの野外教育プログラムの国際シンポジウムに参加して、改めて英語を勉強してきたことの喜びを噛み締めた。そして、日頃感じている疑問「スウェーデン等北欧の人々はなぜそんなに英語が堪能なのか」についていろんな人々と話す中でその答えを感じ取ることができた。

2011年には日本の小学校にも英語活動が導入され、日本の英語教育は大きく動き始めた感があるが、TOEICやTOEFLの点数から判断すれば日本はアジアの中でも最下位に近い状況が続いている。私はこの3年間で日本だけでなく台湾、韓国、アメリカの小学校を16校訪れ、日本及び海外の児童英語教育の実態を知ることができた。また、文部科学省の次期学習指導要領解説外国語編（2017年6月）や東京学芸大学が調査した「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」（2017年3月）を通じて、日本がこれからの英語教育をどのように進めようとしているのかを、児童英語教育に焦点をあてて検証していく。

キーワード：ムッレ；小学校英語活動；次期学習指導要領外国語編；英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業

### 1 文部科学省の次期学習指導要領による英語教育の方向性

日本の英語教育の方向性を考える上で文部科学省の方針を知ることが重要である。2020年4月から小学校に英語科が導入されることについて、次期学習指導要領解説外国語編（2017年6月）には次のような内容が記されている。その一部を掲載する。

#### (1) 外国語科導入の趣旨

- ・グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。
- ・平成20年改訂の学習指導要領は、小・中・高等学校で一貫した外国語活動を実施してきた。「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」などを総合的に育成することを

ねらいとして改訂され、様々な取組を通じて指導の充実が図られてきた。

- ・小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。
- ・学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている。

→小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じた段階的に文字を「読むこと」、「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている。

## (2) 改訂の要点

### ①目標の改善

- ・児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解がふかまるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。

→「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成するとともに、その過程を通じて、「学びに向かう力、人間性等」に示す資質・能力を育成し、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準などを参考に、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の5つの領域で英語の目標を設定している。小学校中学年に新たに外国語活動を導入し、三つの資質・能力の下で、「聞くこと」「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」の領域を設定し、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成した上で、高学年において「読むこと」、「書くこと」を加えた教材として外国語科を導入し、五つの領域の言語活動を通じて、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。

## (3) 具体的な目標

(1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

## 2 小学校英語活動を見学して見えてきたもの

2015年～2017年、私は兵庫県、他府県、そして海外の小学校の外国語活動（一部は外国語）を見学した。但馬で2校、丹波市で4校、篠山市で1校、三田市で1校、神戸市で4校、群馬県太田市で1校（イマージョン校）、台湾で1校、韓国で1校（英語の特別校）、オレゴン州で1校（イマージョン校）を見学した。それ以外にも、英語で幼児教育を行なうKinder Kids International School（日本）、日本の中学校と高等学校、台湾の中学校・高等学校・大学、韓国の大学を訪問した。ここでは兵庫県内の小学校の状況を中心に紹介する。

### (1) 各小学校の英語活動の様子（典型的な5校のみを紹介）

#### ①の小学校の英語活動例

学校の情報	兵庫県の田舎の小規模校	学年：5年生
担任の役割（M）	科目名を教える、PCで発音練習、ゲームの説明、ALTとの会話説明、発話量：7割	
ALTの役割（F）	科目名のモデル発音、母国で勉強した科目の説明、発話量：1割	
子どもの活動	単語の発音練習。What subject do you like? とALTに質問し、他の子どもにも同様の質問をして答えるペアワーク。発話量：2割	
全体の様子	担任の説明が日本語。ALTの出番が少ない。コミュニケーション活動が少ない。	

※Mは男性、Fは女性、ALTは英語実習助手を示す。

#### ②の小学校の英語活動例

学校の情報	兵庫県の中都市の中規模校	学年：6年生
担任役割（M）	教室の後ろで見ていて、時々日本語で補足説明をする。発話量：ほとんどない。	
ALTの役割（M）	挨拶、健康状態、何月何日等の質問。What do you want to be?とその質問への答え方の説明。難しい職業については優しい英語で解説。ゲームの指示。発話量：8割	
子どもの活動	ALTの質問を理解して答えようとしている。指示が理解できないときは私語になる。英語だけの授業でもかなり理解できている。発話量：2割	
全体の様子	ALTが単独で授業を行う。ALT対クラス全体の会話が中心で、子ども達同士の会話練習にまでは発展していない。	

### ③の小学校の英語活動例

学校の情報	兵庫県の田舎の中規模校	学年：6年生
担任の役割（F）	挨拶、曜日等の質問は英語。その他の説明が日本語。動詞表現のカードを見せる。電子黒板を使った練習が中心。発話量：7割	
日本人の先生がALTの役割（F）	その日の会話文を紙に書き黒板に貼る。動詞表現を読む。プリントを配付。ほとんど助手のような働き。発話量：1割	
子どもの活動	教師の質問に答える。電子黒板を使った問題に答える。リスニングクイズには答えているが、PCを使ったやり取りに留まっている。自分が書いた1日の日課を友達と紹介し合う。発話量：2割	
全体の感想	Hi, friendsの本を多く使用。カードを使つての動作を表す表現。自分の1日の日課（簡単な絵と時間）を書き、友達に紹介する。プリント等の作業が多いので、もっとコミュニケーション活動の練習が必要。落ち着いた雰囲気のあるクラス。	

### ④の小学校の英語活動例

学校の特色	兵庫県の田舎の小規模校	学年：6年生
担任役割（F）	挨拶、天気、曜日等の質問。play to the がつく場合とつかない場合の説明等は全て日本語。I can…の補足説明を日本語で。発話量：2割	
ALTの役割（M）	時間の質問。本日のテーマをジェスチャーで説明。キーワードゲームの動詞を読む。ポインティングゲームの動詞を読む。I can…とI can't…のパターン練習。発話量：6割	
子どもの活動	挨拶に答える。スポーツの問題に答える。動詞の発音をしながらキーワードゲームに参加。ポインティングゲームに参加。パターンの文章をオーム返しに繰り返す。発話量：2割	
全体の感想	動詞を使ったキーワードゲーム、ポインティングゲーム等多くのゲームを行う。子どもたちはゲームに参加するが、コミュニケーション活動には発展していない。テキストの人物を使つてのI can…の問題練習。子どもたちにもできることを尋ねるが、子ども同士の会話になっていない。I can…とI can't…の練習のみで他の練習がない。	

### ⑤の小学校の英語活動例

学校の情報	兵庫県の田舎の小規模校	学年：6年生
担任の役割（M）	英語で挨拶し、ゲームの指示をする。教室英語（Same. I see等）をパソコンで説明。ALTとの会話デモンストレーション。Communication, clear voice, eye contact等に気をつけさせる。教室英語は多いが単語だけになり、文章での表現が少ない。クラスを上手くコントロールしている。発話量：5割	
ALTの役割（F）	挨拶、天気、曜日等について英語で多くの子どもたちに話しかける。Do you like …?の質問に英語で答える。ゲーム等の説明はもっとALTができるはず。ゲームのときはクラスの中に入る。アクティブに授業に参加。発話量：2割	
子どもの活動	子どもたちは英語での指示を理解している。Do you like …?と言ってALTに質問。ペアー及びクラス内で質問して回る。教室の前でデモンストレーションをする。振り返りシートに記入。発話量：3割	
全体の感想	挨拶。Head and shoulderの歌。スポーツの言い方をまねる。Do you like …? Yes, I do. No, I don't.をダイナマイトゲーム形式でボールを使つて行う。Hi, friendsの本を適度に使用。I like … Who am I?と言ってその人物を特定するゲームをクラス内で質問し、ゲストの人々にも質問して回る。何人の人々にインタビューできたかをチェック。子どもたちの理解度はかなり高い。子どもたちの活動量が多い。	

## ⑥の小学校の英語活動例

学校の情報	兵庫県の田舎の小規模校（研究指定校）	学年：3年生
担任の役割（M）	Look, listen, loud voice, gestureの表現を子ども達に確認（以下全て英語で指示）。Classroom Englishをカードを使って確認。予定表を示しながら授業を進める。It's sunny todayの歌。『腹ぺこ青虫』の絵本の中でリンゴが何個あるかを聞く。『Dear Zoo』の紹介。本日の単元：「動物の言い方を覚えよう」を板書。カードを多く利用。動物のカードを使ってのすごろくゲーム。4人1組ですごろくゲームすることの説明。発話量：4割	
ALTの役割（M）	挨拶、天気、健康確認の会話。カードの発音をジェスチャーを付けて表現。Phonicsのキーワードを説明。Manの発音に何音あるかを聞く。Dear Zooを説明しながら読む。本の中の動物を発音。Lions, lions, how many lions?等の質問をする。最後の挨拶：Thank you, everyone。発話量：3割	
子どもの活動	ALTの質問に答える。子ども同士でHow are you? ALTの発音を真似る。活動内容が十分には理解できていないところもあるが、何とか理解しようとする姿勢が見られる。ALTの後につづいての発音はきれい。動物の名前の発音をまねる。2名が前でゲームに参加。4人1組でのスゴロクゲーム。最後の挨拶では、Thank you, Chris senseiのようにきちんとできる。発話量：3割	
全体の感想	最初の挨拶に子どもたちが上手く応答できるように教育している。Phonicsの練習には子ども達の興味をひく工夫が必要。読み物は効果的であるが、難しい表現も理解できるような工夫が必要。毎日このような授業を受ければ、子どもたちは相当英語力がつくだろうが、1週間に1度の授業でレベルを上げるためには他の取り組みが必要。動物の名前はよく理解している。すごろくゲームをするが、それがコミュニケーション活動にはなっていない。ALTの質問に答える形でのコミュニケーションに留まるので、それが子ども同士にも発展するとよい。担任の先生がクラスをよくコントロールし、子どもたちの英語力をつけている。	

## （2） 授業見学から見えて来る事柄とその改善策

### ① 英語活動（教科としての英語を含む）担当者の英語力

- ・小学校教員で中・高の英語教員免許を持っている人は約4%（学校教員統計調査，2010）で、多くの先生にとって、英語で授業をすることはそう簡単ではない。その改善策の一つ目は、教員になる前に英語力を身につけることである。次期学習指導要領に関する資料では、小学校で英語を教える担当者には英語検定2級レベルの英語力を身につけてほしいと記されている。大学在学中に中・高の英語の免許取得を奨励する動きは多い。小学校で英語を教える先生に対して、静岡県教育委員会は小学校英語指導資格（LETS）<sup>1</sup>を設けている。これはアクティブラーナーNews配信<sup>2</sup>でも紹介されている。静岡県教育委員会は、養成、採用、現場研修、配置の4本柱で新学習指導要領の英語教育に対応する方針とのこと。英語指導経験が豊富な教員に対し、独自の指導資格（LETS）を認定し2020年度までに中学校英語免許取得者かLETS認定教員を全小学校に配置する予定である。静岡県内の大学に学生の英語指導力強化や教員研修の充実に向けた協力を要請し、英語資格取得を促すため、教員採用試験での加点措置も実施しているとのこと。
- ・神戸親和女子大学児童教育学科では、小学校教員養成課程の中でも中・高の英語教員の免許を取ることができる「広がる進路」という制度がある。児童教育学科に在籍したままで、

総合文化学科の一部の単位を取得すると、中・高等学校の英語の免許が取得できる。通信教育で中・高等学校の英語の免許を取ることも可能だがかなりの覚悟がいる。

- 小学校教員になってからの研修が不足していることも小学校の先生の英語力不足に影響していると思える。兵庫県丹波市では、研修担当（梅垣泰三先生）によると、年に3回英語担当者研修会を開催し、講演会やALTとのワークショップを行っている。各学校では年度当初に英語活動の担当者会をするが、夏期休業中に英語活動を校内研修で取り上げる学校は多くはないとのこと。
- 教育課程企画特別部会（2015年4月）には次のような研修体制が紹介されている。国レベルでは、外部専門機関（独立行政法人の教員研修センター等）による英語教育推進リーダーで指導力研修を行う。各地域の小学校では、英語教育推進リーダーが中核教員に対して研修を実施する。そして各学校で、中核教員が担任、ALT、外部人材等に対して校内研修を行う。また、小中連携を通じて、小学校の教員と中学校の教員・外部人材が双方の学校を訪問し相互研修を行うことができる。しかし実態は、小学校教員の英語教育の研修はまだ十分とは言えない状況である。国や県レベルだけでなく、各市町村教育委員会による中核教員の研修、そして各校での研修の定着がさらに必要である。
- 小学校英語担当者に対して短期の海外派遣を行うことも効果的である。つい最近知り合いの中学校教員が文部科学省主催の英国2カ月間研修を受けた。オーストラリアのパース市に交換教員として派遣されている友人もいる。こういった海外研修をもっと小学校教員にも広がるための法的及び予算的措置が必要である。
- GC&T主催の「次世代型英語教育へのチャレンジ」セミナー<sup>3</sup>での講演で、秋田教養大学専門職大学院の町田智久准教授は、近くの小学校を毎週訪問し担任の先生とTTを行っていると発表した。その担任の先生は英語が苦手な英語を使う授業をしてこなかったが、このTTを通じて英語を使うようになり英語力に変化が起こった。小学校の先生をサポートすることで英語授業を変化させた一例である。
- 東京学芸大学の調査<sup>4</sup>に次のような海外の例がある。韓国では現職教員は相当数（年間60時間～90時間）の研修が義務付けられている。Intensive English Practicum Teacher Training Programといって、3カ月間ソウル大学で学んだ後、残りの3カ月間はアメリカ等英語圏に留学する制度がかつてあった。日本でも財政面でのサポートを充実させて、長期留学を含んだ長期研修が期待される。また、オンライン研修をすることも可能である。ソウル市では、School-based Professional Community という制度があり、学校ごとに研修するシステムがある。ソウル市のように平日の放課後に研修する時間を日本も確保すればもっと研修が充実することだろう。最後に、韓国で実施しているように、小・中・高等学校の教員研修履歴を管理することも一つの方法である。各教員が研修内容を記録しているシステム作り（研修ポートフォリオ）も有益だろう。

台湾では、小学校教員になるにはCEFRのB1レベルが必要なため、週3回程度常勤の英語母語話者とスピーキングのやりとりの練習をすることになっている。日本でも授業だけでは学習の量や質が不十分なことから、外部資格検定試験や語学センター等での英語の補充が必要である。台中教育大学では、予算支援を受け、年に7回程度教員研修を実施している。またオンライン研修も用意されている。台中市の小学校は水曜日の午後に授業がないため、そこで研修する機会が多い。内容的には、指導案作成、授業観察、ワークショップであり、指導力の育成を重視している。日本でもそれらは必要な内容であり、新しい形態の研修（例えば、オンライン講座）等も各学校の管理職や自治体のサポートを得ながら進めていく必要がある。

- 2020年度からの英語導入に際して、小学校の校長や教員の中から、英語教育は専科教員に任せておけばいいという意見を時々耳にする。それも手段の一つではあるが、学校全体で英語教育に取り組む姿勢が子どもたちに与える影響は大きい。そういう環境がさらに広がれば日本全体の英語力の底上げにつながると私は考える。

## ② ALTとのTT連携

- 英語活動でALTとのTTが上手くいっていない原因の一つが小学校教員の英語力にあると考える。小学校教員は多忙であるだけでなく、英語力不足のためALTとの打ち合わせが十分できていない場合もあるだろう。英語力がそれほどなくても、ALTとの効果的なTTやICTの活用等でかなり授業改善が期待できる。
- ALTとの打ち合わせの時間確保が難しい教員には、授業の内容をある程度パターン化して、そのパターンに沿って授業の役割分担をすることが効果的だと考える。例えば、最初の挨拶はALTが行い、その日の授業日程とその日の授業目標は担任が行なう、ゲーム等の説明はALTが担当するといった授業の進め方を細分化しておくといよい。ある程度パターン化したTTの効果的なガイドブックを現在私は作成中である。

## ③ 授業の活動内容の工夫

- ある単元の目標がCan you …? Yes, I can. No, I can't の場合、単純なパターンプラクティスばかりしていると子ども達は飽きてしまう。その表現を使ってクラス内でインタビューすると生きた活動になる。はじめの挨拶の中に日時、天気、健康状態等を尋ねる場合、Can you tell me today's date? のようにCanを入れることができる。挨拶一つをとってみても、教師主導で行うのではなく当番の子どもが前に出て他の子どもたちに尋ねることもできる。ポートランド市のリッチモンド小学校<sup>5</sup>では、日本語と英語のイメージ教育を行っており、そのクラスでは毎日の日時・天気・健康状態等のチェックは日番の子どもが流ちょうな日本語で行っていた。私が日本で取材したすべての小学校では担任かALTが最初の挨拶を行っていたが、もっと子どもたちにそういった活動をさせてもいいだろう。

- ・授業に変化を付ける取り組みとして、上記で紹介した但馬のある小学校での取り組みが非常に効果的である。担任がその日の予定表を示しながら、子どもたちにも理解できる英語で授業を進めていた。ALTとの役割分担もかなりできており、ALTは単なるテーブルコーダーではなく、子どもたちとのコミュニケーションもとれていた。授業の中で絵本の読み聞かせのコーナーがありALTが上手に子どもたちに語りかけてたが、小学3年生には理解できない単語もあったので改善は必要である。絵本の中の動物を使って、動物の名前を覚えたり、またそれでゲームをすることまで発展させていた。Phonicsも取り入れていたが、より定着させるためには改善が必要であると考え。
- ・2016年12月に台湾の小学校を訪問した際、台湾のスーパーティーチャーとしての表彰されたScott Wang先生が指導する小学1年生の授業を見学した。アルファベットを教える単元であったが、英語で授業を行い、パペットを使ったり、子どもたちに二人で向かい合って手をたたきながらアルファベットを言ったりと色々な工夫をしていた。子どもたちを先生の助手にすることも効果的であった。2017年7月、彼が神戸親和女子大学と神戸市外国語大学で紹介した授業内容を紹介する。一つ目は、玉手箱を開くとそれは双六ゲームになっている仕掛け。駒を進めて行くと、色々な箇所にも動作をする指示が書かれており、子どもたちはそれで英語の表現を練習していく。二つ目は、それぞれ違った絵が描かれた8枚のカードがあり、8名のメンバーは受け取った絵の説明を英語です。全員の説明が終わった段階で、それらをどの順番に並べたらよいかをみんなで話し合い、それを1枚の大きな紙に貼り付ける。その紙を折り曲げると1冊の絵本になる。次期学習指導要領でも自分の意見を発表できるようになることが目標の一つなので、これは効果的な教材になるだろう。最後は色と数を覚える魚釣りゲームである。それぞれの魚には違った色と違った番号が付けてあり、くちばしのところにクリップがついているので、それを磁石のついた釣り竿で釣り上げながらその色や番号を発音する。Wangはアクティビティーを通じて英語を使い、実際の場面で必要な英語力を身につけていく方法を使っていた。
- ・Kinder Kids International School<sup>6</sup>の取り組みの中にも数々の参考になることがある。授業の日課はパターン化されていて、その学校が開発したカリキュラムに基づいて教育している。2歳頃から始まる臨界期<sup>7</sup>に人間の脳は言語に対する発達が顕著に見られるという特徴を使って、この園では毎日英語に触れさせ、聞いたり話したりする能力だけでなく、読み書きもかなりできるように教育している。一つの物の名前や表現方法は二つあり、園児たちは園と家庭で上手に英語と日本語を使いわけている。1日の日課は曜日によって多少異なるが、登校してくると、挨拶やその日の予定のチェックから始まり、歌、ゲーム、色や数の勉強、色々な英語表現やテキストでのドリルを行う。座学だけでなく、料理、図画工作、体育、そして社会見学も英語で行っている。一つのクラスは日本人と英語のネイティブの二人制で、それぞれが上手く協力し合って授業を行っている。英語は一つのツ



ルになると英語の上達も早くなる。この園では、5歳での英語力をアメリカ等の小学校3年生レベル（英語検定4級以上）にすることを目指している。その後継続して英語を学習すれば、学校6年生で3級、中学校では2級、そして高等学校で準1級（CEFR C1）を目指すことになるのだろう。これはバイリンガル教育を行なっているぐんま国際アカデミー<sup>8</sup>の生徒が、小学校から英語をはじめ高等学校卒業時に身につけたい学力に匹敵している。次期学習指導要領では、小学校の先生になる人には英語検定2級、中・高等学校の英語の先生には準1級を取得させるのが目標となっている。世界で通じる英語のレベルを目標にするためには、このように小さいときから取り組む必要があるのかもしれないが、一般の公立学校でここまで達成させるためには、学校外での学習が相当時間必要になることは事実である。

#### ④ 2020年から実施予定の小学校5・6年生の教科英語の時間の確保

- 現行の指導要領では、英語活動を5・6年生で年間35時間行なうことになっているが、それだけの時間を全部行なっている学校は多くはないだろう。その理由の中には、運動会等の行事を英語活動に優先させていることが考えられる。また、英語活動を重視している管理職とそうでない場合も多少の影響があるのかもしれない。英語が一般教科でないことも関係しているだろう。一番大きな原因は、韓国や中国・台湾のように、国家レベルで英語教育を何とかしようとしているところとの差が考えられる。小学校を取材をしていて、英語は教科になってから取り組みばよいという空気が伝わって来る。
- 2020年度から週に2コマの授業時間を確保する方法として、多くの学校は1コマは普通授業で、残りの1コマはモジュールの形で15分×3回で実施することが予想される。モジュールの取り組み方法についてはすでにいろんな研究がなされている。45分の時間の授業で行った内容を15分単位でドリル等で復習し、その内容を定着させることができる。また、給食の時間にALTにも参加してもらうこともできる。朝の会や終わりの会を英語で行い日常的に英語が飛び交う雰囲気を作るのもいい。海外の小学校とスカイプ等でテレビ会議を行ったり、文通をすることも一つの案である。姉妹校との相互訪問は小学校レベルでは多くないが、神戸市の桂木小学校はそういった交流を行っている。外国籍の子どもが在籍している場合、英語を使うことにチャレンジするのも生きた活動になる。神戸市のある小学校では、定期的に神戸市外国語大学を訪問し、そこの先生や学生に英語で話しかける活動を行なっている。また、京都や奈良等の観光地に出かけていき、観光客にインタビューをしている学校もある。工夫をすれば、どの地域に住んでいても実用的な英語学習はできることだろう。

#### ⑤ All-Englishの英語授業

- 3年間で取材した小学校の多くは、日本語を使って授業を行なっていた。また、英語による授業を行なっていた一部の小学校、イマージョン教育の太田市の小学校、そして主とし

て英語で授業を行なっているシンガポールやフィリピンの学校との間には非常に大きな差がある。新学習指導要領における外国語（英語）教育についての文部科学省の資料<sup>9</sup>によると、高校生の英語力では特に「話すこと」「書くこと」について課題が大きいと指摘されている。また、次期学習指導要領のめざす高校卒業までの目標の一つが、CEFRのB1（英語検定2級）を現状の32%から50%程度にするというのがある。

- 中央教育審議会「外国語ワーキンググループにおける審議のとりまとめ（2016年8月1日）」<sup>10</sup>には、次のような外国語教育の抜本的強化のイメージが記されている。現行の指導要領では、高等学校でCEFRでA2レベル（英語検定準2級）を目指しており、高等学校卒業レベルで3000語の単語を学習することになっているが、新学習指導要領ではそれがCEFRでB1レベル（英語検定2級）で4000～5000語程度に増えている。
- 上記の資料によると、小学校高学年でA1を目指すことになるが、新たな英語教育の方向性のなかでは次のように表現されている。例えば、なじみのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり答えたりできるようにする。相手意識を持って聞いたり話したりすることに加えて、読んだり書いたりすることについての態度の育成も含めた、コミュニケーション能力の基礎を養う。学級担任が専門性を高めて指導、併せて専門指導を行う教員を活用、ALT等を一層積極的に活用。教科として系統的に学ぶため、効果的な「繰り返し学習」としてモジュール学習も活用。小学校高学年で年間70単位時間を基本とする。また、小学校中学年では活動型の授業となり、相手意識を持って聞いたり話したりすることを中心としたコミュニケーション能力の素地を養う。主に学級担任がALT等を一層積極的に活用したTTを中心とした指導で、年間35単位時間となっている。この場合、多くの小学校のように、日本語を使って指導しているとの目標のレベルには達することができないと考える。
- 新学習指導要領での小学校での新しい目標である「聞くこと」「話すこと(やり取り・発表)」「読むこと」「書くこと」を達成するため、国際教養大学の町田智久は、TOEFL Primaryを活用している。Communication Goalsとして、①小学生のための一般的なスキル別の目標は、The Reading section measures young EFL learner's abilities to read a variety of written English text occurring in familiar contexts (such as school, home, playgrounds, museums)。TOEFL Primaryで目指す目標及びテスト構成としては、The Reading section measures young EFL learners' ability to achieve the following reading communication goals: identify people, objects, and actions. Understand written directions and procedures, understand short personal correspondence (letters), understand simple and written narratives (stories), understand written texts about familiar people, objects, animals, and places. その目標の達成のため、様々な知識や技能の養成を行なっている。

- ・中学校及び高等学校でCEFRのB2～C1（英検準1級程度）を目指す人に対して、Institution for a Global Society (IGS) の英語事業責任者である荒牧国晴は次のように述べている。TOEFL iBTで95点（C1）に非ネイティブ学習者が到達するのに必要とされる平均学習時間は2,000時間だそうである。現行の日本の学習指導要領において、中学校～高校までの6年間における英語学習時間は600～800時間なので、今のままの学習時間では到底C1レベル（advanced）には到達できない。そこで必要なのが家庭での学習時間である。町田の取組の中にEnglish Learning Center (ELC) というのがあり、それはオンラインを活用した双方向の学習教材である。TOEFL Primary版、TOEFL Junior版には各テストで求められるCommunication Goalsの達成を目指したタスクが含まれている。指導手順の（A1を例に）一部を紹介すると、家庭や学校、地域など身近な環境を題材として、受信活動（Listening, Reading）を中心に指導する。発信活動は十分に聞かせた後に行なう。具体的な質問文としては、Which is the girl's room? What do you have in your bed room? What is the boy doing? Where do they live? Please describe the house. What are they doing? Where is the girl traveling to? Play a role of the customer. Take part in the conversation.
- ・荒牧は次のように述べている。Test and Score Data Summary for TOEFL iBT Tests January 2016 –December 2016によると、日本の英語教育の現状は4技能全てでアジアで最低ランクになっている。ちなみに1位はシンガポール、韓国は9位、台湾は17位、中国は19位、日本は下から4位の28位となっている。荒牧の資料によると、韓国で英語教育が成功した背景は、①韓国では、レベルの違う子どもたちへの個別の英語教育、つまり個別指導が充実していること。次にマルチメディアによるネイティブ英語教材が発達している。昨年まで神戸親和女子大学に留学していたソウル女子大学の学生によると、韓国では就職するのが大変なので、多くの学生が夜遅くまで塾に通っているそうである。その結果TOEICやTOEFL等の筆記試験の点数はいいが、会話力がまだまだ不足しているので、就職に向けてさらさらに会話の塾等に通っているとのこと。荒牧によると、学校の授業や補講だけではC1レベルに必要な2000時間にはまだ1200時間足りないので、それを補うのが教室外でのICTの活用が効果的となるとのこと。つまり、eラーニングを使うと、時間と場所を選ばず、自分のペースで大量インプットが可能となる。その中身はvocabulary, reading, listening, writingとなっている。人間の手で添削指導をする場合もあるが、人工知能を使うと修正提案&自動採点が可能となる。全国で、e-Spire<sup>11</sup>の学年単位・学校単位での導入が相次いでいると述べている。

### 3 小学校 教員養成コア・カリキュラム（試案）の検証

小学校英語教育の今後の発展を論じるとき、現在実施されている教員養成大学での授業の様

子や教員研修の状況を知ることが重要となる。この論文では、スペースの関係上小学校の教員養成コア・カリキュラム（試案）の検証についてのみ紹介する。このアンケートは、2015年11月～12月にかけて、東京学芸大学が全国の小学校外国語教育に関する科目を担当している大学教員と全国の都道府県、市区町村教育委員会の指導主事からの回答の結果である。中・高等学校の教員養成コア・カリキュラム（試案）の検証、小・中・高等学校の教員研修のコア・カリキュラムの解説等については、同報告書を参照されたい。

・次の32項目は、学生が教員として外国語活動・外国語の授業を行う際どの程度役立つかについて、5件法の評価について、項目ごとに平均値を算出して比較したものである。

- 1-（1） 外国語活動導入の経緯・現状、学習指導要領
- 1-（2） 主教材（教科書やデジタル教材など） ○
- 1-（3） 小・中・高等学校の英語教育における連携と校種ごとに期待される役割
- 1-（4） 多様な学校・児童のニーズへの対応の在り方
- 2-（1） 言語使用を通じて言語習得へ・類推から理解へ
- 2-（2） 音声に対する敏感さ
- 2-（3） 国語教育との連携によることばへの気づき △
- 2-（4） 意味内容重視 △
- 2-（5） 受信から発信、音声から文字へ
- 3-（1） 英語での語りかけ方 ○
- 3-（2） 児童の発話の引き出し方・児童とのやり取りの進め方 ○
- 3-（3） 文字言語の与え方・読む活動・書く活動への導き方
- 3-（4） 題材の選定・教材開発の仕方
- 3-（5） 年間指導計画・単元構成・1時間の授業構成・様々な活動・学習指導案作成の仕方・短時間学習等の設定 ○
- 3-（6） ティーム・ティーチングによる指導の在り方
- 3-（7） 教材・ICT等の活用の仕方
- 3-（8） CAN-DOリスト形式の学習到達目標と評価における活用
- 4-（1） 授業担当教員による実演
- 4-（2） 映像視聴・授業参観
- 4-（3） 模擬授業 ○
- 5-（1） 聞くこと ○
- 5-（2） 話すこと ○
- 5-（3） 読むこと
- 5-（4） 書くこと

- 5-(5) 技能統合型の活動
- 6-(1) 英語の基本的な音声の仕組み
- 6-(2) 音声・語彙・文法の基本的な知識
- 6-(3) 発音と綴りの関係
- 6-(4) 第二言語習得理論の基礎 △
- 6-(5) マザーグース等・絵本・児童文学 △
- 6-(6) 様々な国・地域の生活・習慣 △
- 6-(7) 異文化交流

同報告書には次のような内容が記されている。全ての項目の平均値は4以上であった。○印のついた項目が4.54+標準偏差以上で、△印のついた項目は平均値が低い項目であった。大学の教員養成課程においては学生自身の英語力、特に聞くこと、話すことのスキルを向上させることが重要であると認識されていることが分かる。この点については教科に関する科目についての自由記述の回答で「学校現場において、教授法については経験を重ねながらスキルアップしていくことが充分期待できるが、確かな英語力を身に付けるための学びは、英語の授業を支えるものとして非常に重要である。」という指摘があった。次に平均値の高い項目は、「児童の発話の引き出し方・児童とのやりとりの進め方」、「模擬授業」、「主教材（教科書やデジタル教材など）」、「英語での語りかけ方」、「年間指導計画・単元構成・様々な活動・学習指導案作成の仕方・短時間学習等の設定」の順であった。これらの内容は小学校での授業に直結するものであり、実施の指導法や教材、指導計画について学生のうちに学び、模擬授業を通じて授業実践力を身に付けておくことが、教壇に立った際に役立つと認識されていると言えよう。

有識者・学会からの意見として、小学校が担う役割や中・高等学校の英語教育のねらいや科目構成を学ぶことは大変重要であると指摘している。諸外国における小学校外国語教育の現状については、諸外国と日本では英語の社会的な位置づけ学校のシステム、教師の多忙さ等、外国語教育を取りまく環境に違いがある場合があり、これらの内容を扱う際には注意を要する。さらには、「授業担当教員による実演」「映像視聴・授業参観」「模擬授業」の3つの学習形態を通して指導技術を学ぶことの重要性が指摘された。また、模擬授業の5つの手順（授業設計・授業準備・授業実施・振り返り・授業改善）が循環していることの必要性も指摘された。

英語コミュニケーションに対する意見として、学生が身につけるべき英語力として、「平易な英語表現を十分正確に運用したり、分かりやすい発音やイントネーションで会話をしたりする」力や英語らしいプロソディーなど、実際の授業で必要な内容を重点的に扱うべきであるという意見があった。英語力は短時間で向上するものではないことから、授業外での自己研修につなげるように配慮すること、また集中演習形式の授業や短期留学等を実施するための予算措置を講じることも指摘された。小学校で英語を教える教員の養成は急務であるが、「数あわせで中学校の英語教員を小学校に配置換えするような短期対応ではなく、大学時代から、幼児・

初学者に英語を指導することについて学んだ経験のある人材を育成していくこと」の重要性も指摘された。ALTについては、英語を話せるだけでなく外国語教育に関する専門性を持った人材が不可欠であり、これらの資質を持ったALTを採用、養成することが急務だとも記されている。

小学校教員に求められる英語力については、①英語の音声面の特徴を理解し、聞き手にモデルとして適切な程度の英語を使用できる ②聞き手を意識して、言い直したり繰り返したりし伝える工夫ができる ③自分の身の回りのことについて、聞き手が理解できる表現、視聴覚教材を使って3分程度の話ができる ④児童の使う英語に対してリキャストできる ⑤段階的に英語を使用して子どもたちを段階的に育てる見通しを持ち、それに応じて表現を選択できる、以上の項目が示されている。具体的な目安としては英検2級程度と多くの有識者・学会から指摘された。

## あとがき

これまで述べてきた教育制度の改善により英語力のある程度まで伸ばすことは可能である。しかし、その国の英語教育に対する社会構造を変えないと、まだまだ英語が一般の人々の生活の中に定着するところまでは行かないと考える。Mulle国際シンポジウムで同室となったLarsさん（スウェーデンの野外生活推進協会の事務局長）は、スウェーデン人の英語力の高さについて次のように語ってくれた。小学校の低学年から始まる英語学習は、読み書きよりも話すこと・聞くことに重点が置いている。また、テレビでも英語の番組はたくさん放送されていて、他の国がやっているようにその国の言語に翻訳されて聞くのではなく、英語の番組は吹き替えではなく、字幕スーパーがついているだけなので、常に英語を聞くことに耳が慣れている。また、北欧の国は小さい国が多いので、自国だけでいろんなことをするのが難しく、共通言語である英語を使って他の国の人々とやりとりをすることが当たり前となっている。日本のテレビ番組で、もう少し英語圏の番組が放映されると社会の雰囲気が変わるのではないかと期待している。

今回インタビューをしたスウェーデン人とフィンランド人の中で、英語の運用能力には大きく分けて二つのグループを発見した。一つ目は、自国の学校教育の中やテレビ等で英語を学んだ人々と海外に1年以上滞在した経験がある人々の中には大きな差があることが分かった。自国の中だけで学習した人々は、英語の発音や語彙にもある程度限界があったが、英語圏での長期滞在経験がある人々の発音はかなりネイティブに近づいており、その運用能力も高かった。Larsさんもアメリカで数年間仕事をした経験があったので、彼の英語力やプレゼン力は素晴らしかった。日本人でも十代で英語圏で1年以上滞在した人たちの日常会話力はかなり高い。日本の英語教育が益々改善され、より多くの人々がある程度まとまった期間海外で滞在し、さらにグローバル化に対応できる人材が育つため、小学校英語教育の果たす責任と役割は大きい。

## 注

- 1 LETSは静岡県教育委員会が考案した小学校英語指導資格  
License for Elementary English Teaching in Shizuoka) (LETS)  
<https://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-010/documents/h28dt22giansyo2.pdf>
- 2 アクティブラーナーNewsは日本各地で活躍する教員のアクティブラーニングの授業が無料で配信されてくるサイト。登録は下記のサイトまで。  
Find! アクティブラーナー編集部 東京都新宿区西新宿2丁目4-1 新宿NSビル10階 電話番号：  
03-5908-1425 メールアドレス：info@find-activelearning.com  
<http://a04.hm-f.jp/cc.php?t=M726472&c=11815&d=7389>
- 3 第5回GC&T主催セミナー「次世代型英語教育へのチャレンジ～グローバル化と英語教育改革が進むなか、身に付けるべき真の英語力とは?～」が2017年9月3日に大阪会場で開催された。敬愛大学国際学部国際学科教授の向後秀明氏（前文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課 教科調査官）、国際教養大学専門職大学院 准教授の町田智久氏、清風南海中学校・高等学校教師の吉田成氏、Institution for a Global Society (IGS)の荒牧国春氏がそれぞれ講演及びワークショップを行った。
- 4 「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」（東京学芸大学、2017年3月20日）（文部科学省委託事業）は全国の教員養成大学の担当者、地方の教育委員会の指導主事に対するアンケートである。この中には、小・中・高等学校の教員養成課程や小・中・高等学校教員研修のコア・カリキュラム等の資料が掲載されている。
- 5 米国オレゴン州ポートランド市にあるリッチモンド小学校では、午前中日本語で授業をすると、午後同じ教科をアメリカ人の先生が英語で授業をしている。日によって午前と午後が逆転することもある。教える内容は教科書の別々の章や単元をそれぞれの言語で教えていき、割合は基本的には半々か多少どちらかの言語に偏ることはある。その子どもたちは、日本語だけでなく英語も高いレベルに達している。
- 6 Kinder Kids International Schoolは、大阪の一つの保育園からスタートした保育園と幼稚園の機能を持つ学校で、英語のみで教育を行っている。全国に21カ所、カナダとハワイにも分校がある。0歳児クラスから5歳児クラスまでの6クラスの定員はそれぞれ20名だが、入園を希望する人が待機状態となっている。
- 7 臨界期仮説は、2歳頃から思春期までの臨界期は刺激に対してきわめて鋭敏で、自然な言語習得が可能であるが、臨界期以前は脳の機能が未熟であり、臨界期以降は脳の柔軟性が低下し、自然な言語習得が衰えるという考え方。発音には臨界期説は当てはまる、16歳以降の言語習得の成功例、1つの塊（チャンク）だと低年齢での英語教育に有利等の解説が『小学校英語教育法入門』（樋口忠彦他、2013）に記されている。
- 8 ぐんま国際アカデミーは群馬県大田市にある英語イマージョンの学校で、初等部と中・高等部から成

り立っている。高等部卒業して海外の大学に進学する生徒も多い。

- 9 新学習指導要領における 外国語（英語）教育について一般財団法人日本私学教育研究所主催 大学入試における外国語（英語）検定試験活用に関する緊急説明会 平成29年6月24日（土）文部科学省 初等中等教育局 国際教育課課長補佐 桜井康仁 ysakurai@mext.go.jp  
[http://www.shigaku.or.jp/news/topics\\_pdf/021\\_docu\\_01.pdf](http://www.shigaku.or.jp/news/topics_pdf/021_docu_01.pdf)
- 10 中央教育審議会「外国語ワーキンググループにおける審議のとりまとめ」（H28.08.01）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/sonota/1377056.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/sonota/1377056.htm)
- 11 e-Spireの学園単位・学校単位での導入している学校は、東京理科大学、学校法人仙台商英・秀光中等教育学校、清風南海中学校・高等学校他6校。お問い合わせはIGSの荒牧：03-6455-0301, [espire@grow-to-global.com](mailto:espire@grow-to-global.com)まで。

## 参考文献

文部科学省次期学習指導要領 外国語編（平成29年6月）

[www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro.../06/.../1387017\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro.../06/.../1387017_11_1.pdf)

塩見和広 「小学校外国語活動の取材ビデオ 6本」

教育課程企画部会 資料3-4 「小学校英語の現状・成果・課題について」、平成27年4月28日

[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/.../1358061\\_03\\_04.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/.../1358061_03_04.pdf)

塩見和広 「リッチモンド小学校の日本語イマージョン教育」神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要 第2号、pp.95-103。

塩見和広 「ぐんま国際アカデミー初等部のイマージョン教育」神戸親和女子大学国際研究センター紀要 第3号、pp.55-73。

塩見和広 「The Merits of Teaching English from a Nursery School: Looking at the measures of Kinder Kids International School」神戸親和女子大学研究論叢 第50号、pp.107-118。

「英語教育に関する平成29年度概算要求等について」

[http://www.u-gakugei.ac.jp/~soumuren/28.10.6/monkasho/04-1\\_eigokyouiku-gaisanyoukyu.pdf](http://www.u-gakugei.ac.jp/~soumuren/28.10.6/monkasho/04-1_eigokyouiku-gaisanyoukyu.pdf)

樋口忠彦、加賀田哲也、泉恵美子、衣笠知子（編）（2013）『小学校英語教育法入門』研究社。